

「使い捨て社会」から 「循環共生社会」へ!

世界は大きく変わり始めています。そのひとつが使い捨て社会から循環共生社会への移行です。

世界の先進国が突き進んできた使い捨て社会は、地球資源を食いつくし、地球を温暖化させて、とうとう私たちの子や孫の未来までも使い捨てようとしています。この流れを、資源を再利用し環境への負荷をできる限り低減していく循環共生社会に変えていきませんか。すでに多くの自治体で行動が始まっています。

三豊市も循環共生社会をつくりましょう。

そして、「使い捨て社会」から「循環共生社会」へ流れを変えましょう!

世界の先進国すべてが

使い捨て社会でした

人類の歴史の中で20世紀の後半紀は、大量生産、大量消費、大量廃棄の時代でした。物を使つては捨て、また新しいものを求めるといふ使い捨ての時代でした。それは日本だけではなく、世界の先進国すべてが使い捨て社会でした。

しかし今、地球温暖化を契機として、世界の考え方が変わり始めています。

古来の日本文化に

「使い捨て」は存在しません

「使い捨て」「ごみ」、こんな言葉も考え方も、日本がはぐくんできた文化の中にはありませんでした。

江戸時代に代表されるように、私たちの先祖は物を大切にし、ひとつの役割が終わつても次の役割を考えて利用してきました。古い手紙を、もう一度紙にすき直したり、ふすまやびょうぶの下張りにしたりと、知恵を絞つて、物を捨てるのではなく活かしてきました。徹底して再利用方法を探してきたのです。

「使い捨て」「や」「ごみ」という考え方は、ほんのここ40年ほどの間に定着したものです。そしてその使い捨て社会は、地球資源を食いつくし、地

球を温暖化させて、とうとう私たちの子や孫の未来までも使い捨てようとしています。この流れを「循環共生社会」に変えようではありませんか。



豊中町学校給食センターの調理くずをたい肥化
それを肥料にして、こんなに見事な桜が咲きます
(不動の滝カントリーパーク)

「菌ちゃんパワー」を活用しよう

2月11日、豊中町公民館において、長崎県で活動している「大地といのちの会」代表の吉田俊道氏による「元気野菜と人間づくり」講演会が開催されました。

当日は260名もの市民が参加し、生ごみから良い土を作るといふことに参加者全員が熱心に聞き入っていました。

長崎のある保育園では、週1回、自宅から園児が生ごみを持ってきます。それを小さくつぶして、「君たちが食べきれなかったものを土の中の微生物菌ちゃんにあげようね」と教えています。生ごみを土に埋めるのではなく、食べ物を土にあげるといふ考え方は、微生物も生き物です。生ごみを小さくして菌が食べやすくとすると、3日で土にかえます。汚いはずの生ごみは、土中の微生物の栄養源になり、それが良い土を作ってくれます。土を元気にし、野菜を元気にすると、人も元気になります。

微生物の力を借りよう！菌ちゃんパワーを借りよう！
 (吉田俊道氏談)

市内ですでに

やっている人たちがいます

山本町では、平成8年度から婦人会や地区衛生

組織等がEM菌(人間や自然環境にとって有用な働きをする微生物群)を使い、家庭などで生ごみのたい肥化に取り組んでいます。



山本町全域に活動が広がっています

辻小学校の取り組みを紹介します



花壇や実習田等で肥料として使っています



給食の調理くずをEMぼかしでたい肥化

10日間程度発酵させます



EMぼかし作り

そして今、このたい肥を使って育てた花壇のパンジーがきれいに咲いています。(表紙写真参照)



「EMぼかし(EM菌を米ぬかともみ殻を混ぜ合わせ発酵させたもの)による生ごみ減量モータ事業(平成8年度実施)」では、80世帯で1世帯月平均23kgの生ごみが減量できました。毎年、「EMぼかし作り」には多くの市民が参加しています。また、辻小学校の児童たちは、給食の調理くずとEMぼかしを混ぜてたい肥化し、花壇、プランター、実習田等に肥料として使っています。

「ごみ大国」で「資源小国」の日本はどう変わるか

日本は資源小国なのに、「ごみ大国」です。家庭から出るものを「ごみ」と考えずに、大切に分別してみてください。分別が徹底できればおのずとごみは減量化し、その多くが再利用できることになります。

少し手間はかかります。しかし、私たちの生活水準が下がるわけではありません。地球環境のため、子や孫の未来のため、少しの手間と時間をかけてみましょう。

地球も命も、長く長く受け継がれていくことを願います。

(文責 二豊市長 横山忠始)

今回は、「三豊市の「ごみ分別」について取り上げます。